

学生アンケートの6項目で全国1位・2位の評価	1
2025年度新任教員の紹介	2
文学部附属国際マンガ学教育研究センター	2
最終9期生を迎えたグローバルリーダーコース(GLC)	2
文学部～この1年～	3～6
総合人間学科／歴史学科	
文学科／コミュニケーション情報学科	
2025年度の教務委員会について	7
2025年度の学生支援委員会の活動について	7
2025年度オープンキャンパス報告	7
留学体験記	7
インターンシップに参加して	7
漱石・八雲教育研究センター活動報告	8
永青文庫研究センター活動報告	8
2025年度熊本大学文学会活動報告	8



## 学生アンケートの6項目で全国1位・2位の評価

文学部長 伊藤 正彦

昨年10月、私たち熊本大学文学部にとても嬉しい報せが届きましたので、保護者の皆様にご報告いたします。それは、2024(令和6)年度「全国学生調査」(第4回施行実施)の次の6項目が全国の国立大学(人文分野)内で1位・2位の結果となったことです。

- Q 5 予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される 国立大学内 2位
- Q 6 質疑応答など、教員等との意見交換の機会がある 国立大学内 1位
- Q15 文献・資料を収集・分析する力 国立大学内 2位
- Q16 論理的に文章を書く力 国立大学内 1位
- Q17 人に分かりやすく話す力 国立大学内 1位
- Q22 幅広い知識、ものの見方 国立大学内 2位
- ※Q15・16・17・22は、学生が「身についた」と感じる能力です。

「全国学生調査」とは、全国共通の質問項目によって学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学の教育改善や国の政策立案などに活用することを目的とした文部科学省と国立教育政策研究所による大規模なアンケート調査です。2024年度の調査では、全国の540大学の学部2年生(約49万人)と4年生等(約51万人)、132短期大学の2年生以上(約1.8万人)を対象とし、13万人を超える学生が回答しました。

さて、熊大文学部が全国の国立大学内で1位・2位となった上記の6項目は、いずれも私たちが重視してきた事項であり、各履修モデルの研究室の環境と少人数教育、専門分野の技法を基礎から修得し、卒業論文を仕上げてゆく教育体系によって身につくものです。Q15の「文献・資料を収集・分析する力」とQ16の「論理的に文章を書く

力」は、国立大学だけでなく参加大学全体でもそれぞれ3位と2位に位置しました。

「全国学生調査」はあくまで学生の意識にもとづくもので、客観的な評価ではありませんが、熊大文学部が重視して教員たちが尽力してきた事項が学生たちからも肯定的に受けとめられたことはまちがいありません。これは、教員たちの大きな励みとなるものです。

以前お伝えしましたように、2026(令和8)年度から熊大文学部は1学科制となりますが、21履修モデルの専門分野の技法を修得する教育体系には変更ありません。1学科制のもとでは1年生の後期に演習形式の少人数授業で、学ぶ作法(発表、討論、レポート作成の基礎)を身につける「文章作成演習」の授業を設け、これまで以上にきめ細かい指導に努めていきます。

18歳人口の急激な減少等によって、日本の大学は厳しい状況にあり、とりわけ人文社会科学系は存続の危機とって過言ではない状態に陥っていますが、保護者の皆様にはひきつづきご理解とご支援をお願いいたします。

2025年度は、熊本大学文学部に2名の新任教員をお迎えしましたので紹介します。新名隆志准教授と楊纓准教授です。新名先生は、前任校での教育経験豊富な方で、社会人間学コース倫理学履修モデルの教育を担当していただきます。楊纓先生は、中国語のネイティブ教員で、ご自身の専門は中国近代経済史ですが、東アジア言語文学コース中国語中国文学履修モデルの教育を担当していただきます。



### 新任教員一覧

所属(学科・コース／研究センター)	専門分野	氏名
大学院人文社会科学部(文学系)哲学分野	二一チエ思想・応用倫理学	新名隆志
大学院人文社会科学部(文学系)歴史学分野	中国近代社会経済史・文学社会学	楊纓

## 2025年度新任教員の紹介

### 新名 隆志

大学院人文社会科学研究所(文学系)哲学分野

2025年4月に着任いたしました。ニーチェ思想研究を研究の柱としており、特に、倫理学・哲学における現代的な理論に対してニーチェ思想がどのような意義を持ちうるかに関心があります。ニーチェは、神なき時代をどう生きるかという優れて現代的な問題に向き合った人でした。神や宗教から切り離された生の意味、あるいは道徳の意義、それらは現代倫理学・哲学も問う重要な問いですが、ニーチェ思想はそこに興味深い示唆を与えようと考えています。



講義や演習では、現代の倫理学・哲学領域でホットな理論的研究や、具体的な社会問題に関わる倫理的論点を主に取り上げていくつもりです。現代では、社会や生活の様々な領域で、その実践を支える倫理規範を問い直し、再構築することが求められています。学生と共に、私たちの日常と未来を支える思想・規範を模索していきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

### 楊 纓

大学院人文社会科学研究所(文学系)歴史学分野

2025年4月に着任いたしました楊纓と申します。文学科東アジア言語文学コースの教員として、中国語および中国文化・文学に関する科目を担当しております。中国出身で、修士課程は熊本大学で学びました。この貴重な経験を活かし、学生の皆さんが中国語を楽しみながら確かな運用能力を身につけられる授業づくりを心がけております。



専門は中国近代社会経済史で、近代化の過程における沿海地域と内陸地域の不均衡な発展構造、特に内陸部がいかんして世界経済へと組み込まれていったのかについて研究しております。また、文学と社会の相互関係にも関心があり、作品をその時代の社会状況や人々の暮らしと併せて読み解くことの面白さを、学生の皆さんと共有したいと考えております。

歴史的・社会的視点と文学的感受性の両面から、中国の言語と文化が織りなす豊かな世界を、ともに探求していきましょう。どうぞよろしくお願いいたします。

## 文学部附属国際マンガ学教育研究センター

開設4年目を迎えた文学部附属国際マンガ学教育研究センターは今年も多方面の活動を展開しました。

熊本大学とブルゴーニュ・ヨーロッパ大学(UBE)との大学間交流協定締結記念として、10月22日～11月4日に蔦屋書店熊本三年坂店で「熊大まちなかキャンパスフランス バンド・デシネ展～芸術大国のマンガたち～」展を開催しました(ニューコ・ワン株式会社との共同企画)。フランスのマンガ「バンド・デシネ」を題材に当センターとUBEで展示パネルを作成したほか、サガズ先生にも著書『くまモンといっしょにフランス語』の解説パネルを展示していただきました。

10月25日には関連イベントとして、フランス語翻訳家の原正人先生をお迎えしてトークイベント「海外マンガ翻訳出版奮闘記」を実施しました(聞き手:池川佳宏准教授)。ブルゴーニュワインの試飲会もあり、イベントは

### 国際マンガ学教育研究センター兼務教員 池川 佳宏

大盛況となりました。

そのほか、天理大学附属図書館より『週刊少年サンデー』『週刊少年マガジン』の創刊から10年分の寄贈を受け、研究資料も充実しています。

また、昨年創刊した論文誌『視覚批評』は大変好評で、当センターの取組とともに表象文化論学会のニューズレターでも取り上げられました。次号掲載の論文も集まり、鋭意編集集中です。



▶大盛況のトークイベント(ワインつき)

## 最終9期生を迎えたグローバルリーダーコース(GLC)

文学部グローバルリーダーコース(GLC)は、2025(令和7)年4月に本コース最後の新生として9期生10名を迎えました。昨年度に続き、今年度の文学部GLC生も様々な活動に活発に取り組んでいます。

海外留学については、昨年度のワルシャワ大学(ポーランド)、シドニー工科大学(オーストラリア)に続き、ボルドー・モンテニュ大学(フランス)へと旅立っています。海外短期留学プログラムや国際奨学事業も実施され、文学部GLC生も参加しました。

この一年、4年生となった6期生は、卒業後の進路に向けての活動や卒業論文執筆に真摯に取り組んできました。3年生に進級した7期生や2年生となった8期生は、引き続きGLCでの研修やセミナー、フィールドワークを

### 文学部GLC教務専門委員 新井 英永

含めたプログラムへの精力的な参加を通して学びを深めています。2025年4月に入学した9期生は、5月24日(土)～25日(日)の2日間、GLC1年生を対象として実施された天草研修に参加しました。今後とも文学部GLC生の活躍にご期待ください。



▶2025年4月に入学した文学部最終9期生(2025年10月15日撮影)

## 総合人間学科

### ■哲学

志牟田 早彩さん(4年)



私はこの一年、演習と卒業論文の執筆を並行して行ってきました。演習では、論文の担当箇所をレジメにまとめ、授業の中で議論を行ってきました。自分の卒業論文の分野とは違う内容でしたが、論文の書き方や受講者の自分とは違う考え方を学ぶことができました。卒業論文については、3年生の時から進めていた時間についての研究を深め、自分が最初に提示した問題点を解決できるように努力しています。執筆を進めるにあたり、今までに書いた自分の論文に対して新しい視点を入れて先生と議論をすることで、今まで詰められていなかった観点を考え直しています。新たな疑問点や、新しい意見とかがつて書いた意見との矛盾点などを一つずつ解決していくことで、論理的に分かりやすい論文になるように努めています。時間についての研究はかなり抽象的なものであり、実体のあるものではないため研究に行き詰まることもあり。そのため、先生など他の人の意見を参考にしてみたり、様々な文献に当たって今までとは違った考えを取り入れたりすることを意識しながら執筆を進めています。

### ■心理学

原 彩乃さん(3年)



人間は表情を判断するとき、顔のどの部分を見ているのでしょうか。目の辺りを見ているのか、あるいは口元を見て判断しているのか。それは表情の違いによって異なるのか。実験によって人間の心の働きを客観的に捉えることができる心理学は、私にとって自身への謎に迫っているような楽しさがあります。

心理学は、人の行動を測定して、心の働きや仕組みを調べる学問です。心理学履修モデルでは、論文を読んで研究法や実験法に関する知識を習得し、実際に心理学実験を行うことで理解を深めていきます。寺本先生、安村先生によるご指導と心理学研究室の方々のご支援によって、1年間で心理学についての知見が大きく広がりました。また同じ研究室の友人と協力し、助け合いながら、課題にも取り組んでいます。さらに心理学履修モデルでは、公認心理師資格の取得のために必要な科目が開講されています。基礎心理学から応用心理学まで幅広く学ぶことができます。

私は現在卒業論文の作成に向けて動き始めています。これまでに学んだことを最大限に活かしていきたいです。

### ■倫理学

岩崎 なな子さん(3年)



倫理学とは、人間の規範となる物事の道徳的な評価、すなわち善と悪について検討する学問です。倫理学履修モデルでは、規範倫理学、メタ倫理学、応用倫理学等の分野について学ぶことができます。以前からいらした田中朋弘先生に加え、今年4月から新名隆志先生が着任されました。

私が所属するゼミでは、各自がそれぞれ興味のあるテーマに基づいて文献を読み、要約して発表し、ディスカッションを行っています。最近では、安楽死や出生前診断のような生命倫理的テーマのほか、AI・ロボット倫理、企業倫理、さらには実存主義に関するテーマなど、幅広い議論が行われました。自分の興味のある分野以外の発表を聞き、ディスカッションに参加することによって、新たな視点を獲得することもでき、研究を進めるうえでとても重要な時間になっています。また、ゼミの

雰囲気もとても良く、不定期でゼミの先輩方と交流できる懇親会も開かれています。学業だけでなく、就職活動についても先輩方からお話を伺うことができ、自分の将来を考えるうえで非常に参考になります。

私は現在「出生前診断は倫理的によいことなのか」というテーマを中心に、生命倫理学全般について関心を持っています。まだ卒論にいたるまでテーマを深められていませんが、今後ゼミの活動に参加するなかで、よりこのテーマを深めていけたらと思います。

### ■社会学

武内 孝樹さん(3年)



社会学とは、社会のしくみやそのなかで生きる人びとを研究する学問であり、個人から国家、またグローバル社会のレベルまで対象は幅広いです。そしてその目指すところは、私たちの普段の生活での「当たり前」を問い直すことにあります。たとえば大学生の新卒一括採用は、世界中にあるしくみではなく、とくに戦後日本の経済成長のなかで普及し定着していった「時代と場所限定のルール」であり、私たちはそれを「当たり前」だと思い込んでいただけなのです。

私の所属するゼミでは、こうした事象に関する種々の書籍や論文をみなで輪読し、議論をしています。とくに今年度のメインテーマである新自由主義については、文献でその歴史的展開を学びつつ、今日の著しい格差の問題との関連について参加者同士で意見を交わしています。こうした大学での勉強は、高校までとは違い、与えられた問題に対して、教科書にある決まった解答を書くというものではありません。自分で問いを発見し、先生や周囲の友人たちとの議論を通じて考えを深めていく必要があります。とはいえゼミでは勉強ばかりでなく、定期的に懇親会などのイベントもやっていて、アットホームな雰囲気です。

### ■文化人類学

犬童 陽奈子さん(3年)

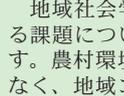


世界には、私たちの常識では測れないさまざまな文化や社会のあり方が存在します。文化人類学は、そのような違いを優劣ではなく「違い」として受けとめ、人びとがどのように世界を意味づけ、関係を築いているのかを探る学問です。フィールドワークを通して現地の人びとの生活に寄り添いながら、自分自身の文化を相対化できることも特徴です。そこから自分の「当たり前」が他の社会ではそうではないと気づくことで、世界を見る目が広がるということこそ文化人類学の最大の魅力だと思っています。

ゼミでは、文化人類学的な民族誌を輪読する「演習」と、ゼミ生それぞれの研究に関して発表する「応用演習」の2つの授業が開講されています。ゼミは多国籍・多言語な環境で、そこでの議論によって、自分では気づかなかった視点に出会い、研究室にいながら他者との関係のなかで自分の価値観を問い直す経験ができます。ゼミ生の研究テーマも、イヌワン猟実践やエヴェンキ人の粉食とジェンダーの関係、モンゴル医学、SNSなど非常に多様です。授業の他にも、白川沿いでパーベキューをするなどメンバーとの交流も盛んです。

### ■地域社会学

加藤 千香子さん(3年)



地域社会学とは、地域が抱える課題について取り組む学問です。農村環境や過疎問題だけでなく、地域コミュニティや福祉

などの地域社会に関わる様々なテーマを扱います。論文を読むだけでなく、フィールドワークを通して実際に現場の声を聴けることは地域社会学の1つの魅力です。

今年の3年生は社会調査実習にて、熊本県熊本市川尻で、川と関わってきた歴史を活かすまちづくりに関する調査を行い、現在、調査報告書にまとめているところです。ゼミでは、論文などを輪読し、そこから浮かぶ疑問点や論点について意見を交わします。このディスカッションを通して、あらゆる視点から物事を考える力や多くの知識を身に付けることができます。

ゼミは温かく、楽しい雰囲気、冬には鍋を囲むほど仲が良いです。担当教員の先生方は優しく、豊富な知識で指導して下さいます。楽しくのびのびと学ぶことができ、また人としても成長できるのが地域社会学ゼミの良さであると感じています。

### ■民俗学

南里 泰心さん(4年)



民俗学とは、一定の集団が保持している現在まで伝承されてきた文化を研究対象とし、それらを調査・分析することで、現代の生活文化や価値観を明らかにする学問です。実際の現場で聞き取りや観察といったフィールドワークをおこなうことが、主な研究手法となります。

私はこの一年間、佐賀県の高苔養殖について研究をしてきました。高苔養殖は生育の具合が自然環境に大きく左右されることから、かつては「博打」と表現され、高苔は「博打草」と呼ばれていました。養殖技術が発展した現在では、これらの表現をすることはありませんが、本当に現在の高苔養殖は「博打」ではなくなったのでしょうか、ということを考えるのが私の研究テーマです。過去の高苔養殖について文献を調べたり、高苔養殖業者の方から現在の高苔養殖についてお話を聞いたりして、調査をおこなってきました。卒業論文では、これらのデータを民俗誌という形で資料とし、そこから分析・考察をしていきます。

今年度の4年生の卒業研究は、地藏祭りや山車、郷土玩具から学校行事やカバンについてたぬいぐるみ、パチンコまで幅広いテーマが揃い、どの研究も面白いものに仕上がってきています。

残り少ない学生生活、悔いの残らないように過ごしていきたいと思っています。

### ■地理学

深江 菜穂さん(3年)



地理学は、人々の暮らしや地域の特徴、社会の動きを「場所」という視点から考える学問です。自然環境や街のつくり、産業や文化など、身のまわりのさまざまな出来事が“どこで・なぜ起きているのか”を読み解くところに面白さがあります。この研究室では、そうした地理学の考え方をともに、学生それぞれが自分の興味のあるテーマと結びつけながら研究を進めることができます。観光や地域振興、農村、スポーツ、都市問題など、幅広い分野を自分らしく深められるのが魅力です。

この1年間は、地理調査実習で実際に地域へ出向いて聞き取り調査や土地利用調査を実際に行ったり、GISの使い方を丁寧に教えてもらい、地図づくりやデータ分析を行ったりするなど、実践的な内容を学ぶことができました。

研究室は明るくて賑やかな雰囲気、とても居心地が良い環境です。わからないことがあっても先生方や先輩方、同級生みんなに相談しやすく、楽しく学んで成長できる研究室です。

## 歴史学科

### ■日本史学

2025年度は新2年生9名、新入大学院生1名を迎え入れ、総勢43名となりました。新歓ガイダンスをはじめ、田原坂への遠足などの行事に多くの参加者があり、上級生・下級生との親睦が図られ、研究室としてまとまる良い機会となりました。

9月に実施した歴史資料学野外実習では、学内で布田家文書(肥後の里山ギャラリー協力)を、宮嶋利治学術財団(八代市)で鹿子木家文書(八代市立博物館未来の森ミュージアム協力)の整理と目録作成を行いました。実物資料に触れる機会に恵まれ、難読文字に悪戦苦闘しながらも3年生が頑張ってくれました。実習終了後には「古文書実習報告書」の作成に取り組んでおり、良い刊行物となるように頑張っています。卒業論文構想発表会や中間発表会も滞りなく開催でき、4年生の成果が報告され、参加した2～3年生には刺激となっているようでした。

日本史学のカリキュラムには地域社会に貢献する内容が組み込まれています。講義で取り上げているテーマの資料が、地域で保存されていることもあり、野外実習では作業を通じて経験することができ、今年度も良い成果を公表できるよう取り組んでいきます。



▶遠足にて、田原坂をのぞむ

### ■考古学

2025年度の学生は、2年生10名、3年生5名、4年生9名、大学院修士課程1名、大学院博士課程1名(ラオス留学生)の総勢26名を数えます。力強く考古学研究室を牽引された小畑弘己先生の昨年度末におけるご退職に伴い、2025年度より教員2名による新たな体制がスタートしました。新体制の下で実施した奄美群島・徳之島の発掘調査実習では、昨年から引き続き中世・古スク時代のミンツキ集落跡の発掘を進め、中国陶磁やカムイヤキの出土のほか、複数におよぶ水田面の重複を確認する成果を挙げました。学生の調査技術の習得にとどまらず、学術的にも価値のある成果を挙げつつある点は、教員・学生双方にとって印象深く刺激的な経験となっています。一方、創設51年を数える熊大考古学研究室の草創期を支え、基礎を築かれた甲元眞之先生、白木原和美先生が、それぞれ2月と7月にご逝去されました。深い悲しみに包まれた1年にもなりましたが、多くのOB・OGよりご連絡いただき、先生方の築かれた研究室が多くの方々への拠り所として活着していることを再確認しました。教員、学生ともに改めて身を引き締め、教育や研究と真摯に向き合い、研究室の伝統を継承し発展させる

決意を新たにしました。



▲徳之島伊仙町ミンツキ集落跡の発掘メンバー

### ■アジア史学

2025年度のアジア史研究室には、3人の2年生が新たに加わるようになりました。これにより、4年生3人、3年生4人に加えて、中国からの大学院生3人と研究生2人を迎えたことで、アジア史研究室の構成人数は合計で15人となりました。アジア史としては近年稀に見る学生数の多さです。新2年生の3人は行事に積極的に参加してくれるため、以前のような賑やかな研究室が一気に戻って参りました。また漢文読解の取り組みも素晴らしく、めきめきと実力を伸ばしています。

夏には昨年から引き続き2年生2人、3年生2人、4年生1人が合宿に参加し、宋元時代の法律と裁判機構についての論文の読解に挑戦いたしました。合宿場所は水郷として有名な福岡県柳川市でした。論文はきわめて難解かつ長大なものでしたが、参加者の皆さんはしっかりと取り組んで一定の理解に達していたものと思います。論文読解を終えた翌日には、学生たちは舟に乗ってのお堀巡りに参加しました。こうした経験は、学生たちに舟での移動が一般的だった江南中国の人々の生活に思いを致すことを容易にするはず。勉強の機会はどこにでも転がっているものですね。

構成員の増加により、アジア史研究室も新たな歴史の段階に至っているように思えます。来年度は一層の努力を学生たちとともに払っていく所存です。



▶お堀巡りに参加した学生たち(柳川市にて)

### ■西洋史学

4月には、9名の2年生と2名の大学院生を迎え、にぎやかなスタート(総勢25名)。グローバル・キッチンや夏合宿といった恒例行事を通じて、一気に親睦が深まりました。授業のキーワードは「ジェンダー」「人種」「移民と食文化」。たとえば、近世ヨーロッパで髭(ひげ)やカツラがもつ「男らしさ」の文化史的な考察を行ったり、アメリカにおける化粧・美容文化の発展が白人・黒人双方の女性にとってどのような意味をもったのかを議論しました。夏季集中講義では、神聖ローマ帝国史をご専門とする渡

邊裕一先生(福岡大)をお迎えし、宗教改革、疫病(ペスト)、魔女狩りについて学びました。また今年度は卒業生が大活躍。博士号を取得した藤井太郎さんが、デビュー作『18世紀ニューイングランド漁業のグローバル・ヒストリー』を出版。中学校教員の佐保明尚さんの授業実践が、『西日本新聞』の記事「主権者意識を育む」(8月10日)で取り上げられました。11月には、青年部同窓会が開催。20～30代の卒業生60名が大集合です。うち13名が教員として活躍しており、加えて4年生2名が高校・中学の教員採用試験に現役で合格、4月から教壇に立つ予定です。「未来への種をまく」情熱あふれる教員が、西洋史研究室から着実に育っています。研究室の最新情報は、オリジナルのホームページに掲載中です。



▲天草夏合宿、美しい夕日をバックにパーベキュー

### ■文化史学

2025年度は、大学院生1名と学部生7名が新たに研究室のメンバーとなりました。大学院生2名、学部生23名、総勢25名です。

今年度の夏合宿では佐賀県の武雄市に赴きました。市の図書館や温泉施設などの特徴的な近現代建築を鑑賞しつつ、夜のパーベキューを通じて知り合ったばかりの先輩後輩同士の親睦を深め、同じ研究室の仲間としての一歩を踏み出しました。そんな学生同士の話し合いで決まった今年の課題研究テーマは「欲求」。竹久夢二や小津安二郎、ロートレックにラヴクラフトといったクリエイターたちの創作欲求、見世物小屋や百貨店に集まる人びとの珍しいものを見たいという欲求、どうしても酔っ払いが許せない人とどうしても酒を飲みたい人の欲求が交錯したアメリカの禁酒法制定とその結末など、各自のテーマで研究し、年度末のレポートにまとめました。

新井先生の演習テーマは現代文化論研究、鈴木先生の演習では福沢諭吉『日本男子論』を精読しました。女性を取り巻く問題は当事者の女性が解決するというものではない、むしろ男性側の意識変革こそ不可欠という福沢の問題意識に学びつつ、自らが生きる21世紀の現代文化について洞察を深めることができました。



▲9月下旬、夏合宿で武雄温泉に赴いた際のひとコマ

## 文学科

### ■日本語日本文学 佐藤 樹莉さん (3年)

日本語日本文学研究室は、日本文学や日本語について自分の「好き」と結びつけて追究できる研究室です。講義や演習を通して、さまざまな「なぜ?」「どうして?」を拾い上げて解明していきます。

日本語学の演習では、女子向けファッション雑誌の表紙に散らばったカタカナの機能を分析したり、漫画作品のオノマトペや方言終助詞の分析をしました。また、日本文学の演習では、『源氏物語』や百人一首を崩し字から自分たちで読み解いたり、小泉八雲『怪談』を読んで分析し、気になった視点から考察したりしています。

身の回りにたくさん転がっている疑問や興味のあることをぶつけ合い、互いに受け止め合う。私は、そんな忙しくも楽しい日々を送っています。



▲日文研究室で語らう学生たち

### ■中国語中国文学 猪木 奏さん (3年)

中国語中国文学研究室では、主に中国語圏の文学・政治・文化について幅広く勉強しています。中国人留学生との交流も多く、新たな発見を通して充実した大学生活を送っています。今年は集中講義で高知県立大学の高西先生をお迎えし、『捜神記』の宋定伯の話や『桃花源記』など、志怪小説や伝奇小説を中心に中国古典世界の多様な文化や思想について学びました。また本研究室には語学学習に熱心な学生も多く、私自身も今年中国語検定に挑戦して学びをさらに深めることができました。

中国というと身近なようで意外と馴染みのない方も多いと思います。しかし実際に学んでみると、日本文化と密接に関わる部分もあれば驚くような相違点もあり、非常に学びが深い分野だと感じています。



▲ZOOMを併用した卒業発表会

### ■英語英米文学 中山 萌華さん (3年)

英語英米文学研究室では、松岡先生、永尾先生、ケリー先生の3名の先生方の手厚いサポートのもと、英米文学を中心に自身に興味を持つ分野を深く学んでいます。

今年の授業では、シェイクスピアの『ハムレット』を原文で読み、時代背景などをとくに作者の意図を分析したり、米文学作家ジュリー・オオツカ作品を丁寧に精読したりと、授業ごとに様々なアプローチで

英米文学作品を学びました。また学期末に行われた卒業発表会では、先輩方の研究成果を実際に聞いたり、先輩方と交流をしたり、とても充実した内容でした。

英語での読解力・表現力も自然と鍛えられ、主要言語である英語を通して世界をより広く、深く理解することができるようになることが英米文学を学ぶ醍醐味の一つだと感じています。



▲4月の履修ガイダンスにて

### ■独語独文学 樋口 梨々花さん (2年)

独語独文学研究室は学生10名という少人数ならではの温かい雰囲気の魅力です。パウアー先生と荻野先生が丁寧に学びを支えてくださり、ドイツ語の基礎から応用までしっかり身につけることができます。授業ではカフカの原文読解のほか、方言やことわざ、歴史など思わず夢中になるテーマが多く、発表の機会も豊富で自分の成長を実感できます。研究室は学生が自由に集まれる居心地の良い空間で、休憩したり調べ物をしたりと自然と人が集まります。新入生歓迎会も楽しく、学年間の距離がすぐに縮まります。この研究室に入ったことで、文学だけでなくドイツ語圏の文化を深く知り、ドイツがますます好きになりました。



▲ある日のセミナー終了後、五高記念館前にて。

### ■仏語仏文学 大神 いのりさん (3年)

仏語仏文学研究室では、外国語としてのフランス語を基礎から応用へと、反復演習を重ねながら段階的に深めていきます。文法学習に加え、様々なレベルやジャンルの長文読解を通じ、文化や思想への理解を広げられることが大きな魅力です。ネイティブの先生による講義も開講されているため、四技能を総合的に伸ばすことができま



▲第1回卒業論文中間発表会

す。さらに、授業で様々な学習に取り組む中で、フランス以外の国々についての知識が自然と身につく、多文化理解につながる点も特長です。学生数は5名と非常に少人数ですが、縦のつながりが強く、先生との関わりも密接なため、食事会や双方向的な授業など、小規模研究室ならではの交流が行われています。有意義な大学生活を送りたいあなたは、是非当研究室へ!

### ■比較文学 桑野 七星さん (3年)

本研究室では、所属学生は比較文学の多様なテーマに取り組んでいます。4年生の卒論は文学作品のほか、アニメ、映画も扱い、テーマが多彩です。授業では、演習での議論は活発で、刺激になります。前期は「比較文学基礎演習Ⅰ」で、『世界文学のアンソロジー』(秋草俊一郎ほか編)を用いて、世界文学の読解に挑戦しました。後期には、「比較文学基礎演習Ⅱ」において、『比較文学比較文化ハンドブック』(今橋映子ほか編)を手引に、それぞれ自分でテーマを設定し、発表を行っております。また、井上暁子先生は後期から約3か月間ポーランドへ研修に行かれ、研究活動に従事しながら、現地で研究者との交流を深めておられます。さらに、10月初旬に研究室同窓会が開催され、OBで福岡大学講師の野田康文氏が芥川龍之介「羅生門」について講演されました。



▲木曜昼お弁当の会の前に

### ■国際文化学 川淵 愛夢奈さん (3年)

国際文化学は、国内外の多様な文化事象を多角的に調査・研究する学問です。学生は自分の興味に沿ってテーマを設定し、先生からの丁寧なフィードバックを受けながら研究を深めています。私は卒論に向けて、「技能実習生への日本語教育」をテーマに、方言理解や専門用語の習得方法などを調査しました。その過程で漁協の方や実習生へのインタビューも行い、実践的に学びを広げています。このように、国際文化学では世界各地の文化事象について学び、基礎知識を蓄えながら、自分の本当に興味のある分野について自分で開拓していくことができます。みなさんもここで自分の「好き」「興味関心」をさらに深めてみませんか。



▲学生・教員みんなでイタリアの食文化を学ぶ

## コミュニケーション情報学科

### ■ 全体総括

コミュニケーション情報学科では今年4月に本学科最後の1年生を受け入れました。学科長として挨拶をしてガイダンスに参加した折に、一人一人の快活な自己紹介を伺いましたが、頗る健康な佇まい、知的好奇心に輝く瞳に、学科の有終の美を飾る立派な卒業論文を完成する未来を大いに期待しました。ふつう進級に伴って学科の中でお兄さんお姉さん、つまり後輩を背中導く立場になっていくわけですが、この1年生たちは卒業までフランス語で言うバンジャマン(benjamin<聖書のベニヤミン、ヤコブの12人の息子達の末っ子)のままです。優しく頼もしい上級生から大事にされながら大学生活を謳歌してくれたらよいでしょう。

そして、今年度は創学環への移籍が見込まれている2名の新しい教員を迎えました。大藪亮教授の専門はマーケティング。フィンランドでご研鑽を積まれたことが頷ける、洒脱な佇まいが印象的な先生です。上土井宏太准教授の専門は英語教育ならびに議論学。品の良い優しい方で、ピアノの道に進もうか迷われていたことがあるとのお話を一度伺いました。もう一人、育児休業中の教員の代替として、ヴィオレタ・リスタ講師が1年間本学科での教育に従事していますが、堪能な日本語と明るい笑顔で学科の人気者です。リスタ先生は言語習得における自律的学習について研究されています。

### ■ 就職状況

今年度卒業予定の42名の就職内定率は88.1%、進学を含めた進路決定率は90.5%となっております(2025年12月末現在)。インフレや国際情勢の不安定などマイナス要素もありますが、国内・県内の就職状況は概ね堅調です。青田買いの傾向はより強くなり、就職内定時期も前倒しになりつつあります。

本学科の卒業生の傾向として、近年は情報通信系やITソリューション、マーケティングを含めた企業コンサルへの就職が多くみられます。そのほか広告業界を含めたマスコミへの就職も継続的にあり、学科の特色が出ていると言えるでしょう。今年度は公務員や教員への就職も増えました。熊本県内や九州への就職が多い傾向から、今後はTSMCを含めた半導体企業などの電器・機械・材料関連の就職が増加する可能性もあります。

### ■ コミュニケーション情報学コース

コミュニケーション情報学コースは今年度新たに20名の2年生を迎えました。合計66名(4年生:28名、3年生:18名)の学生が当コースに所属しています。ここでは、江藤君と本田

さんに、それぞれ4年生と3年生を代表して就職活動と交換留学について報告させていただきます。

#### 江藤 由侑さん(4年)

卒業論文を執筆しながらの就職活動は大変でした。とにかく後悔のないように頑張ること。これを心がけて就職活動に取り組みました。家族のサポートもあり、早い段階で無事以前から希望していた企業から内定をいただきましたが、後悔していることがふたつあります。ひとつ目は、もっと早くに業界研究だけでも済ませておけば良かった、ということです。業界研究は、どの業界が自分に適しているのか、自分を見つめ直す貴重な機会でもあります。ふたつ目は、自分自身の学生生活や学習成果に引け目を感じていたことです。私には(家族のこと以外について)あまり誇って話せるエピソードがありませんでした。しかし、「誰よりもやる気がある」という自分の強みを見つけた後は、それを積極的に伝えようとなりました。私たちがどれだけ興味深く魅力的なのか伝える方法を見つけ、自信をもって邁進すれば、希望する結果を掴むことができると思いました。

#### 本田 梨紗さん(3年)

私は、大学2年の後期終了後、熊本大学の交流協力締結校のひとつポーランドのワルシャワ大学で交換留学生として学びました。渡航前は英語資格の対策に特化した授業などを積極的に受講して英語運用能力を高めるように努力しました。また、留学前に卒業論文のテーマを決め、留学中に実施するフィールドワークの計画も立てました。幸いなことに民間企業が提供する奨学金も給付していただき、ポーランドで充実した学びや研究に取り組むことができました。新しい世界を知ったことで、日本にいるだけでは得られなかった視野や考え方を得ることができました。現在は、留学で得た経験を活かし、将来は海外での挑戦も視野に入れて就職活動を頑張っています。



▲ワルシャワ大学での授業風景

### ■ 現代文化資源学コース

現代文化資源学コースの25年度学部生は、2年次8名、3年次16名、4年次18名を数えます。昨年度末に第3期卒業生14名を送り出し、今年度から新設された博士後期課程を含めて大学院生が10人在籍しており、毎年本コースの卒業生から大学院へ進む学生がいることも大きな特徴と言えるでしょう。国立大学では初の本格的な現代文化の研究コースとして、オープンキャンパスでは九州以外の地域から研究室見学に訪れるケースも見られるようになりました。

25年度末をもって文化人類学の慶田勝彦教授が定年を迎えられます。慶田先生は水俣病を含めた熊本県史のアーカイブに尽力され、本コースでは分野を横断した教育研究を進めてこられました。長い間ほんとうにお世話になりました。一学科制への移行に伴い、旧来の現代文化資源学コースは今年度の新1年生が最終学年となりますが、最終学年の卒業まで、言語学・文化人類学を含めた多彩な学びを提供いたします。

26年度入学生からはより現代文化に特化した新・現代文化資源学コースとなりますが、大きな方針に変更はありません。「現代文化」をキーワードに、戦後のマンガ、映画・映像作品、ネット表現、キャラクタービジネスなどの文化と、社会や地域とのかかわりについて広く学べるコースとして、文学部附属の国際マンガ学教育研究センターと連動しながら展開していきます。

### 現代文化資源学の多面的な授業

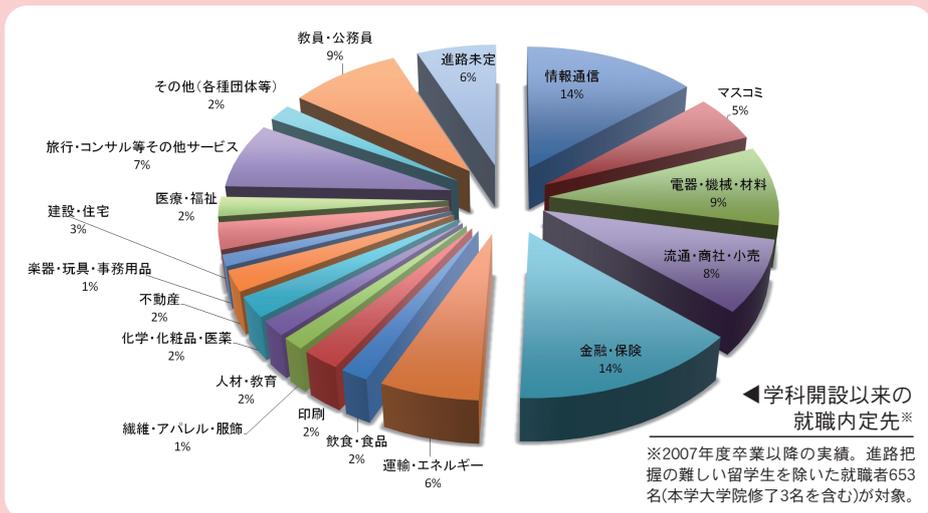
#### 田中 鈴夏さん(4年)

本コースのなかで、特に印象に残っているのが「無形文化資源論」という授業です。一冊の本を学生、先生全員で読み込み、それぞれが深めてきた考察や調べた情報を披露しあって議論を交わす授業でした。少人数で行うため、全員に発言する機会がまわってくる上に、先生方も議論に加わってくださるため、毎週違った発見がある実りの多い学習になりました。一般的な講義では自分の思考を人に共有する機会が少なくなりがちなため、「考える」→「発表する」→「フィードバックをもらう」という一連の流れを、ひとつの授業で経験することができてよかったと感じています。

「課題研究」として取り組んできたゼミは、学生各自が自分の興味関心にそった研究をすることができました。私は映画「男はつらいよ」を題材に選び、調査・研究を進めています。3年のときはマンガを対象に研究活動をしていたため、幅広いメディアの研究を実践できる充実した楽しいゼミになっていると思います。また、専門的な情報から論文の形式といった基本的なことまで先生からの助言をいただけるため、論文としての方向性を見失わずに研究に励むことができます。個人的には昔から好きだった映画を、卒論として本格的に研究することができて、純粋に楽しさを感じています。



▲男はつらいよの舞台



## 2025年度の教務委員会について

文学部教務委員会 委員長 寺本 渉



文学部教務委員会は、正副委員長のほか各学科選出の4名の教務委員から構成されており、教務担当職員と密接に連携して教務全般の管理運営を行っています。学生は、大学で学ぶにあたり、授業を履修登録して受講し、試験等による評価を経て単位を取得し、進級して進学コースを選択します。コースでは、履修モデルごとに専門的な教育を受けて卒業論文を執筆し、学士となります。その節目ごとに学生自身が期限内に申請しなければならない手続きがあり、進級や卒業には定められた要件があります。また、休学・復学、退学、転学部・転学科等の身分異動の申請も出されます。

そうした申請や要件について審議することが教務委員会の業務になります。その他、教務委員長は全学の教務委員会にも文学部を代表して出席し、全学的な教務のあり方を議論します。

来年度の新生から、これまでの「四学科制」から「一学科制」へと移行します。それに伴い、これまで各コースで実施していた新生ガイダンスや文章作成演習、コースガイダンスなどを、学部全体で実施することになります。また、共創学環の始動に合わせて、一部の授業にも変更があります。こうした変更が旧カリキュラムとも整合がとれるように、学生の皆さんが安心して学業に専念できる体制を、今年度の教務委員会で検討しています。

## 2025年度の学生支援委員会の活動について

文学部学生支援委員会 委員長 井上 暁子



文学部学生支援委員会は学生生活全般のサポートをする組織で、委員長1名、各学科から選出された委員4名で構成されています。4月の新生ガイダンスでは、新生活および授業の履修に関する情報提供と支援を行います。学科ごとに新生歓迎会もあります。

また、当委員会は、就職支援課と連携して、学生の就職や進路に関する情報を提供し、様々な支援をしています。文学部の進路支援に特化した独自の学部共通科目「キャリア支援」、3年生を対象とした「就職ガイダンス」(法学部と共同)、eラーニ

ング形式の「就職準備講座」(全5回)など、多岐にわたったサポートが実施されています。民間企業の協力による、1、2年生を対象とした「キャリアガイダンス」もあります。こうした手厚いサポートシステムが、本学部の高い就職率につながっています。

本学には奨学金制度や学費免除の制度もあります。学生時代は、社会との関わりを意識しながら生活や学習の中で試行錯誤し、様々な知恵を身につけていく時期です。学生の主体性を尊重しながら、充実した人生への助走を応援するのが当委員会の役割だと考えています。

## 2025年度オープンキャンパス報告

文学部広報・情報化推進委員会 委員長 茂木 俊伸

2025年8月2日(土)に、文学部オープンキャンパスを開催しました。暑いなかの開催でしたが、昨年度と同様、北は北海道から南は沖縄県まで、九州内外から大勢の高校生に参加いただきました。

この数年、全国的に猛暑が続いています。昨年度までの文学部オープンキャンパスは予約なし(当日参加者を全員受け入れ)の形だったのですが、屋外に行列ができたり教室に入れない方が出たりした場合は危険だということで、今年度は上限800名の事前申込制を導入しました。短時間で枠がすべて埋まってキャンセル待ちの状態になり、開催側としてはちょっとホッとした反面、申し訳なさも感じたところです。

各コース教員による模擬授業と、各自で学生研究室巡りができる研究室訪問は、今年も好評でした。特に研究室訪問は、在学生や教員に直接質問や相談ができるということで、高校生だけでなく保護者の方も熱心に参加くださっています。

今年度も、在学生の皆さん、教職員の皆さんに多大なご協力をいただき、大きなトラブルなく無事に終わることができました。来年度は1学科制移行後初のオープンキャンパスとなります。次の委員長にしっかりとバトンを渡したいと思います。

## 留学体験記

■文学科  
安部 悠さん(4年)

私は2024年4月からの約半年間、旧西ドイツの首都であったボンで留学をしました。この留学は困難と挑戦、そして自身の価値観を揺るがす経験の連続であり、私を大きく成長させてくれました。



▲ボン大学本館

日本が目まぐるしい準備期間を終えたのも束の間、現地では言語の壁に苦しみました。ドイツ語での行政手続きや、ただでさえ日本より多い授業の予習…。留学前にもっと勉強してくればよかったと今でも後悔しています。言語ができない劣等感から逃してしまった機会も多くありました。それでも学習を続けていると、だんだんと意思疎通が可能になっていき、授業の内容も理解できる部分が増えていきます。この成長感覚は、何物にも代え難い喜びでした。

留学には多くの費用や時間がかかる一方、語学力や困難に挑む経験自体は日本でも手に入るかもしれません。しかし、生活の全てが挑戦となることも、言語的・文化的なマイノリティになる経験も、さまざまな背景をもつ人々と同じ境遇を共有する友人になれる機会も、日本では得られません。また、留学中は自身の枠組みでは捉えきれないものにぶつかり、自分の常識を疑う機会に何度も出会います。これらは多様な他者への寛容さばかりでなく、彼らと共に生きる自分の芯をも育ててくれます。留学では「地平の融合」が経験ベースで起こると私は考えます。

留学という限られた時間の中では、自分がどう動いたかで経験が大きく変わります。これから留学に行く人は、ひとつでも多くの機会に参加して、ひとつでも多くの挑戦をしてください。成功も失敗も、思い出と経験になります。



▲ボンの街並みの一角

## インターンシップに参加して

■コミュニケーション情報学科  
富山 聡子さん(4年)



▲グループワークでの発表

就職活動を始めた当初は志望業界が定まっていなかったため、業界や企業について知るために約50社の会社説明会とインターンシップに参加しました。何社かは対面で参加しましたが、ほとんどはオンライン形式で実施されたものに参加し、場所を問わずさまざまな企業の取り組みや働き方に触れることができました。また、社員の方や他大学の学生と交流する中で、企業の雰囲気や事業内容への理解が深まっただけでなく、自分の強みや課題を客観的に見つめ直す機会にもなりました。さらに、企業によって求める人物像や働き方が異なることを体感し、回数を重ねるうちにグループワークで自分の考えを簡潔に伝える力や相手の意見を引き出す姿勢が身についたと感じています。

このように、さまざまな企業のインターンシップに参加したことで、自分が関心のある領域や、働く上で大切にしたい価値観を明確にすることができました。その後の就職活動では、インターンシップで明確になった価値観を軸に企業選びを進め、納得のいく進路を決めることができました。インターンシップで得た学びが、将来の進路を考える上で大きな支えになりました。

## 漱石・八雲教育研究センター活動報告

漱石・八雲教育研究センター長 濱田 明

漱石・八雲教育研究センターは、2017年12月に設置された文学部附属センターです。熊本大学の前身である第五高等学校ゆかりの夏目漱石と小泉八雲について、本学教員がセンター兼務教員として共同研究を行い、文化行政機関等との連携により地域文化振興に貢献するとともに、人材育成に寄与することを目的としています。2020年には定期刊行雑誌として欧文雑誌Soseki and Hearn Studiesを創刊し、現在Vol. 5まで発行しています。

本年度の主な活動としては、まず昨年度に引き続きNPO法人くまもと漱石文化振興会と「漱石九日読書会」を共催しました。今年度は「漱石とハーン」と題し、漱石に関心を持つ約80名の市民を対象に、坂元昌樹先生が10月12日の第一回、西槇偉先生が11月9日の第二回、濱田明が12月7日の第三回と連続講演を担当しました。

またNHKの連続朝ドラマ「ばけばけ」により注目が高まっている小泉八雲について、熊大まちなかキャンパス「ラフカディオ・ハーンの熊本時代—『東の国から』を読む—」という企画展を開催しました。12月17日から23日は来日二作目『東の国から』についてのパネル展を、12月20日にはトークイベントを上記の3名が行いました。



▲熊大まちなかキャンパス「ラフカディオ・ハーンの熊本時代—『東の国から』を読む—」

## 永青文庫研究センター活動報告

永青文庫研究センター専任准教授 今村 直樹

まず特筆すべきは、2025年、公益財団法人永青文庫が所有し本学に寄託されている貴重資料のうち、9,346点が国の重要文化財「細川家文書」に追加指定されたことである。この指定は、当センターが2009年の発足以来、6年半をかけて完成させた「熊本大学寄託永青文庫資料総目録」(約5万7,700点分)のデータに基づくものであり、人文社会科学系の学問分野における基礎研究の重要性が再認識される機会となった。

次に研究活動では、水前寺地域での知られざる西南戦争の実態を解明し、2025年7月にその成果を記者発表した。2026年3月には、稲葉継陽センター長を編者とする『細川キリシタン群像』(勉誠社)および研究紀要『永青文庫研究』第9号が刊行予定である。基礎研究では、稲葉センター長・今村直樹専任教員それぞれを代表者とする科学研究費補助金に基づく共同研究が、着実な進展をみせた。

社会貢献活動では、稲葉センター長・今村専任教員・日高愛子兼任教員・後藤典子特別研究員が担当した第40回附属図書館貴重資料展「永青文庫細川家文書 国重要文化財指定記念展」(2025年11月2日～11月4日)、および第19回永青文庫セミナーを開催した。これらは前述の重要文化財追加指定を記念したもので、貴重資料展の来場者は史上最高の532人を記録するなど、大変盛況であった。



▲第19回永青文庫セミナー会場の様子(2025年11月2日)

## 2025年度 熊本大学文学会活動報告



2025年度 文学会理事 米島 万有子

文学会は、文学部の教育と研究を様々な形で支える、学生と教員による互助組織です。今年度は主に、以下の事業を計画・実施しました。

1. 文学部の教育・研究環境整備のための支援金  
教育研究整備費として50万円を支援。
2. 講演会・学会等への支援  
熊本を主会場とする講演会・学会の開催に対し、2～10万円の支援を計画。現時点(2025年12月17日)において、「経済地理学会西南支部7月例会」に補助。
3. 就職活動に対する支援  
各履修モデルの希望に応じて就職情報誌の提供や、就職活動の履歴書用写真の撮影費補助を計画。
4. 研修旅行補助  
授業の一環として行われる調査・実習旅行、各研究室で課外活動として行われる合宿・研修旅行に対する補助。現時点において、4件の研修旅行等への補助を実施。
5. 進級記念品  
4年生に進級した学生会員に対する記念品(1人4,000円の図書券)を贈呈。
6. 新入生歓迎行事、オープンキャンパス、卒業式関連行事に対する支援  
学科やコース・研究室で行われる新入生歓迎行事(新入生1人あたり

1,000円)および、オープンキャンパスの研究室訪問(各履修モデルあたり6,000円)を補助。本年度も卒業関連行事への補助を計画。

7. 図書等整備費  
学生用図書充実のため、今年度は文学部とコミュニケーション情報学科にそれぞれ15万円の補助。
8. 留学のための語学試験補助  
留学する際に必要な語学試験に対する補助。現時点で3件の申請に対して補助。
9. その他  
学生用コピー機の維持管理費、『文学部通信』の発行費用ならびに保護者の方々への郵送費を負担。令和7年8～10月までの大雨・地震等による激甚災害被災者への補助事業を計画。

上記の事業は、会員(学生と教員)の会費によってまかなわれ、文学部の教育・研究活動に広く還元されるものです。未加入の皆さまにおかれましては、ぜひご加入くださいますようお願いいたします。今後も、文学会への皆さまのご理解とご協力をお願い申し上げます。

文学部通信 第25号  
2026年3月1日

発行：熊本大学文学部／熊本大学文学会  
編集：熊本大学文学部 広報・情報化推進委員会  
茂木俊伸、富村憲貴、田中朋宏、稲葉継陽、池川佳宏  
ウェブサイト <https://www.let.kumamoto-u.ac.jp>

